

時を越える

伝統と文化に学ぶ

小高神社境内で行われる野馬懸は多くの馬の中から神の思召しにかなう馬を捕えて神に献ずる神事である。

昔、野馬追当日、原町菅浜巢掛場の木戸から追い出された野馬の群を、騎馬武者が後から追い、小沢の野馬道を通り、小高城内に設けられた竹矢来^{たけやらい}に追い込んだことから、現代の行事は始まっている。

午前十時頃から祝詞奉^{のりと}上^とがあり、今日の祭りに仕える御小人^{おほしめ}達十数人が御祓^{おはら}いを受け、白衣、白鉢巻、白スボンに草蛙^{くさづゐ}ばきで、竹矢来に入つた馬の中から屈強な馬を見定め、竹竿^{たけざら}に縄をつけた駒^{おまたらし}とり竿^{おまたらし}を御神水に浸して、それを馬の背に打ちかけ、その馬を御小人総^{おほしめ}がかかりで素手で捕える。荒れ狂う捍馬^{かんばん}を捕えることは危険を伴つもので瀕死^{ひんし}の怪我^{けが}を負つた御小人にはすかさず御神水をかける^{おみだらし}と^{おみだらし}蘇^そ生^{せい}する^{すまひ}といふ。

第一番に捕えた馬は、神馬として妙見社に奉納、他は駒せりを行い御祝儀相場として数十万、数百万円でせり落とされ、観衆からの拍手喝采を浴びる。

この後、竹矢来の西隣の神社境内の原で、小高郷の騎馬武者による神旗争奪戦が行われ、七月二十二日から延々四日間に及び「相馬野馬追祭」のすべての行事が終わる。

奥州相馬妙見祭其三 野馬取之圖



奥州相馬妙見祭其三 野馬取之圖

十九世紀前半 歌川(安藤)広重写 木版図